

平和文化研究 第36-37集 (2016年度)

渡辺千恵子氏資料の概要紹介と若干の検討

～被爆者の旧蔵資料の整理をめぐって～

木永 勝也

Cover Artwork: Seiryō Ikawa

長崎総合科学大学
長崎平和文化研究所

渡辺千恵子氏資料の概要紹介と若干の検討

～被爆者の旧蔵資料の整理をめぐる～

木永 勝也

概要

本稿は、本学で寄贈をうけた、渡辺千恵子氏資料の概要紹介と、若干の検討を行う。被爆者が残していく資料をどのように整理していくのかという課題や保存、整理に関する問題点を考える予備的作業である。また、渡辺資料の資料的意義を確認していく最初の試験的な試みの報告である。

目次

はじめに	22
1. 渡辺千恵子氏の経歴など	23
2. 渡辺千恵子氏資料の来歴と資料の概要	23
3. 渡辺千恵子氏資料の紹介（1）図書・雑誌・各種パンフレットなど	25
4. 渡辺千恵子氏資料の紹介（2）諸団体資料	26
5. 渡辺千恵子氏資料の紹介（3）写真、書簡など	28
6. 渡辺千恵子氏資料の紹介（4）手書き原稿など	29
7. 渡辺千恵子氏資料の紹介 — 遺品類	30
おわりにかえて～被爆者資料をめぐる今後の課題	31
参考文献	32

はじめに

2016 年 3 月に、本学で故渡辺千恵子氏資料（以下、渡辺資料）の寄贈をうけた。現在、本学長崎平和文化研究所で整理作業を始めたところであるが、本稿は、その資料の概要紹介を行うものである。

戦後 70 年を経て、被爆記録や体験記の収集などは、原爆資料館、国立平和追悼記念館などでも進められてはいる。平和行政の経緯については行政の担当部局や公文書管理のなかで、十分になされてこなかったきらいはあるが、今後、資料の蓄積もされることが期待はされる。反核・平和を求めて活動してきた団体や著名な個人については、各

団体での年史刊行や、マスメディアなどによる記事化、自伝・評伝などでの紹介は行われているものの、個人所蔵資料の保管や記録・整理がされることは十分ではなかっただろう。

今後、よりいっそうの展開を期待したい被爆者個人資料の保存、整理、活用の方途を考えるための実験的・予備的作業を進めることが、渡辺資料の整理作業になると思われる。本稿では、その作業で検討すべき様々な課題や問題点の一部を指摘しておくことにしたい。

本稿での紹介を機に、本学の大学生、附属高校生の平和学習に生かすとともに、関心をもって

ただいた地域市民、研究者の方々に公開し、利用・活用を図っていくようにしたい。本稿は、反核・平和を求めて活動してきた当事者の声が込められている資料をどのように生かしていくのか、その活用の方向性を考えていくための準備作業でもある。

1. 渡辺千恵子氏の経歴など

渡辺千恵子(1928-1993)氏は、長崎の、というより全国的にも著名な被爆者の一人である。長崎の被爆者の代長崎での被爆を語る平和運動の原点を作り、車いすに乗り反核を訴え続けた姿を記憶している人は多い。被爆者団体、長崎原爆被災者協議会の会長である谷口稜暉氏は、『原爆を背負って谷口稜暉聞き書き』(西日本新聞社、2014年)において、山口仙二氏とならぶ長崎の被爆者を代表して活動してきた人物として言及紹介している。

渡辺氏は、1928年9月5日に長崎市銅座町に生まれる(実家は履物商だったという)。長崎市内の佐古小学校を卒業後、1941年私立鶴鳴女学校に進学した。この女学校生徒の時、爆心地から2.5Kmにあった三菱電機製作所(平戸小屋町)で学徒動員中に被爆した。倒壊した鉄骨の下敷きになり脊椎を骨折、下半身不随となり、その後、長く自宅に閉じこもった。同じように被爆した女性たちと出会った1955年、「長崎原爆乙女の会」を立ち上げた。山口仙二、谷口稜暉らが同年に立ち上げた長崎原爆青年会と、翌1956年に合流し「長崎原爆青年乙女の会」を結成した。1956年には長崎原爆被災者協議会も結成され、この年、長崎市で開かれた第2回原水爆禁止世界大会で、被爆者代表としてスピーチした。以後、被爆者運動や原水爆禁止運動に尽力し全国的にも知られるようになる。1977年には8月9日長崎市の平和祈念式典で、車いすにのり「平和への誓い」を読んだ。長崎を訪れた修学旅行生に、あるいは日本各地で被爆体験を語るなど、後年「語り部」と呼ばれる活動を先駆的に続けており、とくに1970年代末から80年代には海外へも渡航、1980年には国連軍縮特別総会に

参加するなど、世界各地でも核兵器廃絶を訴え続けた。1993年3月13日に死去した。

自伝ともいえる、渡辺千恵子『長崎に生きる“原爆乙女” 渡辺千恵子の歩み』(新日本出版社、1973年、2015年に新装版を刊行)にくわしい年譜がある。評伝ともいえるものとして、日比野正己『シリーズ福祉に生きる7 渡辺千恵子』(大空社1998年)がある。また、渡辺千恵子作・東本つね画『長崎を忘れない』(草土文化、1980年)などもあり、各種の大会などでの発言が文章になって発表されている。

長崎における反核・平和をめぐる動向・諸問題の変遷、とりわけ戦後の被爆者運動、平和運動などについては、史資料をもとに、研究対象として振り返られ検討される時期に入ってきている。運動の経緯や実情などを実証的に検討していくうえでも、当事者に関わる資料はかかせないが、こうした視点からみたとき、研究の基盤となる資料の収集・整理などの面では、遅れが目立つように思われる。本稿では、被爆者運動の草創期から関わった渡辺千恵子氏が残した資料ということで、可能ながぎり、1950-60年代の時期に焦点をあてながら、当事者資料のアーカイブとしての可能性をさぐることにしたい。

2. 渡辺千恵子氏資料の来歴と資料の概要

故渡辺千恵子氏関係資料は、2016年に長崎平和文化研究所に、かつて本学教員であった日比野正己(ひびの・まさみ)氏より寄贈したいとの申し出があり受贈することとなった資料である。

渡辺千恵子氏が暮らしていた長崎県西彼杵郡長与町の自宅に所蔵されていたもので、渡辺氏が死去後、日比野正己氏が譲り受け保存してきたものである。日比野氏が教員として勤務していた長崎純心大学の研究室に写真のようなスチールキャビネットとその周辺で保存されてきていた。



写真 1：キャビネットに保存していた状態

日比野氏が 2016 年 3 月末で退職予定となるなか、バリア・フリー・デザインや福祉デザインという、自分の学問、活動の原点・出発点が、長崎総合科学大学に勤務していた時代の仕事にあったことから寄贈につながる事となった。1970 年代末から 80 年代に渡辺氏の活動が広がった背景には、「障がい者」として「自立」した生活をおくり始めたことがあり、渡辺千恵子氏の「私の自立」と題したするエッセイでは、自立した人生への喜びや希望がつづられている（『季刊 科学と思想』第 39 号、1981 年 1 月）。

「被爆者」である渡辺氏は、戦後は長崎市内音無町で暮らしていたが、1970 年代半ば、二人暮らししていた母親が高齢となったこともあり「自立」を考え、1976 年 12 月に本学建築学科の日比野正己（当時助教授）にあたらしい家の設計を依頼した。次兄の家族との二世帯同居として、1978 年 1 月に完成した住宅（「千恵子の家」）で暮らしはじめたあと、1979 年 6 月に母が死去した後も自宅での生活を送った。自宅の設計などでの日比野正己氏と本学の建築学科の教員・学生らの協力、当時の学生らとの接触・交流を通じて車いすでの行動を経験し、その生活準備をはじめていった経緯については、日比野正己『「学生時代」熱中宣言』（講談社、1985 年）に詳しい。とりわけ、渡辺千恵子氏の転換点ともいえる時期の体験・経験は、長崎総合科学大学の学生らとの交流・接触によるもの

であった関係もあり、本学への寄贈となったのである。また、こうしたことから、渡辺資料のなかには、「千恵子の家」建築関係資料や障害者団体関係資料も含まれている。

以上のような来歴から理解できるだろうが、渡辺資料は、故人である渡辺千恵子氏の親族から縁のあった日比野氏に渡された、いわば遺品群といってよい性格をもつ資料である。

とはいえ、故人である渡辺千恵子氏の私的な領域、プライベートに関わる資料はあまり多くはない。何が“私的”なことであるのか、線引きが難しいが、たとえば、渡辺千恵子氏の日記や手紙などは残されていない（故人を知る関係者に聞いた限りでは、日記をつけていたという）。

量的には、先の写真でも示した、企業や学校で使用する事の多い事務用のスチール製キャビネット（180×90 cm）4 個分程度とそこからあふれている部分がある。かなりの部分（キャビネット 3 個分ほど）が図書・書類関係ではあるが、資料としては文献にとどまらず非常に雑多なものから構成される。このため、どのように整理して活用・公開していけばよいか、検討すべきことがらが多いという実情にある。

さて、下記に、整理作業のために仮分けした資料群での項目を示しておこう。残された資料の形態（図書、冊子など）から、あるいは資料群の内容から整理することは難しく、あくまで整理作業上での便宜的な分け方である。とはいえ、できるだけ資料の寄贈をうけた状態（さらにいえば、日比野氏が譲り受けた状況）を保持したいという企図から分類している。

記載した資料群項目の中から、いくつかの項の詳細を紹介しつつ、あわせて資料整理での課題・問題点を提示していきたい。以下、下線部を伏した資料について記していく。

1. 図書・雑誌・各種パンフレットなど

渡辺千恵子氏への寄贈図書、被爆者証言集。

長崎の証言の会の機関誌、小説や文学作品全集などを含む数百冊。

2. 諸団体資料

原爆青年乙女の会、長崎原爆被災者協議会など諸団体資料。原水禁運動関係資料。修学旅行生の感想文集など。

3. 写真類（アルバムなど）

各種団体、証言活動関係写真（修学旅行講話風景なども含む）、パネル写真など

4. 手書き原稿など

各種団体、世界大会、被爆者集会での挨拶・訴え等の原稿。行事や集会での挨拶などの草稿、メモ、報道関係の取材などへの応答メモなど。

5. 「平和への旅」に関する一件資料

1985年に完成された渡辺千恵子氏の活動を素材とした合唱組曲の構成案、台本、各種メモ等。

6. 「千恵子の家」建築関係および障害者団体関係資料

7. 書簡、ハガキ等

渡辺氏に贈られた礼状等の手紙、年賀状、挨拶状などはがき類

8. 遺品類

車いす、編み機、編み物類等。陶器類、様々な装飾品、絵画等

3. 渡辺千恵子氏資料の紹介（1）図書・雑誌・各種パンフレットなど

量的には、渡辺資料の大半をしめる。小説や文学作品全集などを含むが、内容面からいえば、むしろ原爆・被爆関連や戦争被害・加害などを扱った図書が多い。雑誌などでも2017年現在では入手困難であるものも多く、一例をあげておけば、「長崎医大原子爆弾救護報告」を掲載した『週刊朝日 臨時増刊』1970年7月25日号がある。

被爆者の証言集などは、長崎の証言の会の機関誌など刊行・市販されたものもあるが、パンフレット（小冊子）形式のものも多く、入手困難なもの

が多い。



写真2：被爆体験集のパンフレット

写真2は、いずれも1960年代に出された被爆体験集、被爆体験手記である。『白い窓』は1960年8月に長崎原爆病院患者有志の名で刊行された冊子である。長崎の被爆者として、詩人・文学者、というより長崎の反原爆詩人として評価・知られる福田須磨子もかかわっており、長崎県立図書館では福田須磨子氏旧蔵資料の一つとして所蔵されている。

図書などのなかには、渡辺千恵子が購入したであろう図書であろうが、著者などが署名し渡辺氏へ贈呈されたと思われる図書も多い。

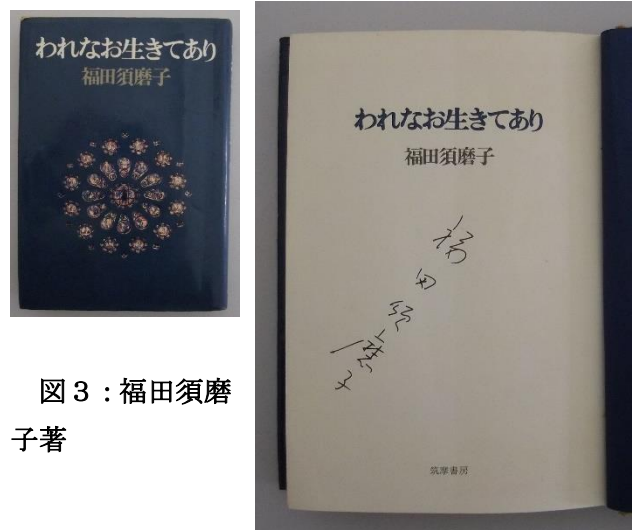
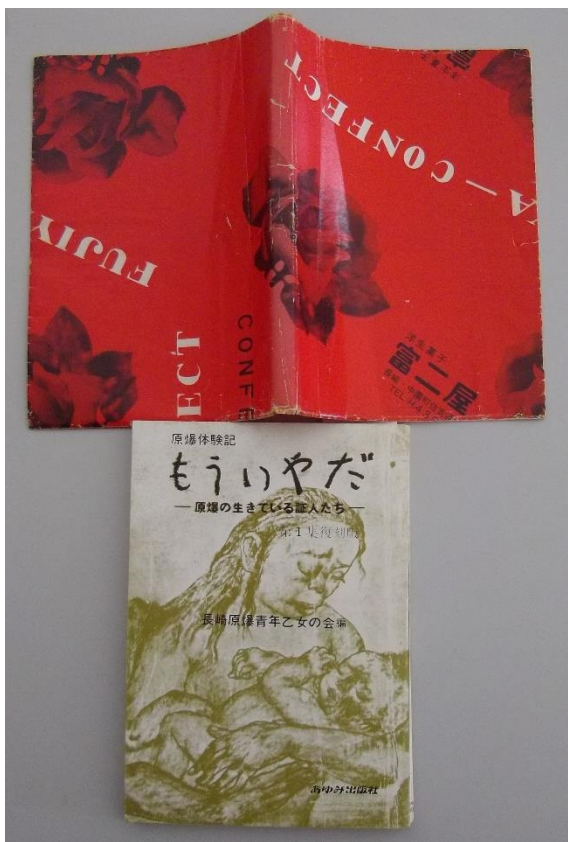


図3：福田須磨子著

写真は、福田須磨子『われなお生きてあり』筑摩書房の初版本であり、福田本人の署名が入っている。

下の図4の写真は、長崎原爆青年乙女の会編集にかかる、原爆体験記『もういやだー原爆の生きている証人たちー』である。1950年代の最初に出版した際の初版ではなく（渡辺資料ではまだ所在を確認できていない）、1970年代に復刻出版した版である。写真にみるように、菓子屋の包み紙をブックカバー風にかけている。おそらく本人が大



事に手元に置いていただろうとも想像できる。

写真4：『もういやだ』

現在、書名などを入力した目録を作成している（2016年12月には、書名などを中心とした過半の図書の目録データを作成した）が、寄贈の際の署名などは目録などに記載すれば、ある程度しることができよう。しかし、この写真のような状況は表現しにくいので、本稿で記載することとした。

なお、目録については、歴史史料などでは確定的な目録ではないものの、仮目録を作成して公開ということが多い。渡辺資料の場合はそれ以前の、

きわめて暫定的な目録を公開して、随時補充を行っていくという、整理・公開の手順を考えたい。他の資料群のなかに雑誌やパンフレット（小冊子）が入っている場合も多いためであり、仮に資料の形態ということから整理をしていって目録作成をして公開という手順を考えると時間がかかりすぎるだろう。そのため Web サイトを利用し、今後、2017年の早い時期に長崎平和文化研究所のサイトページ（<http://www.nipc.campus.nias.ac.jp/>）での公開しておくこととしたい。

4. 渡辺千恵子氏資料の紹介（2）諸団体資料

渡辺資料には、原爆青年乙女の会、長崎原爆被災者協議会など被爆者団体や、原水禁運動など運動諸団体の関係資料はむろん多い。資料は、下記写真5のようにまとめられている場合もある。

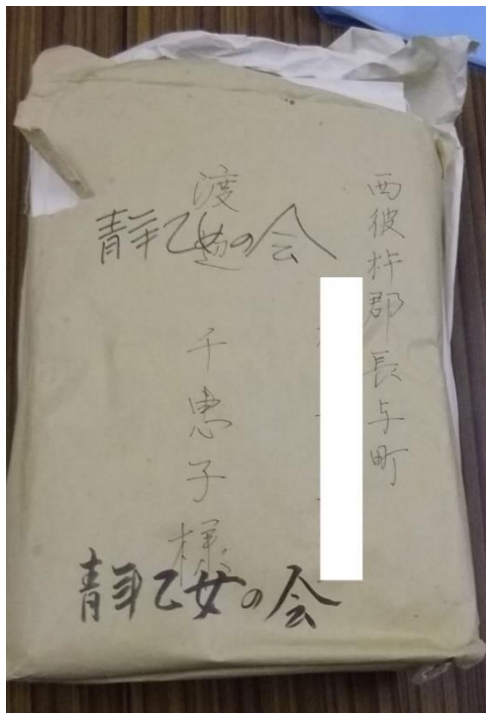


写真5：封筒にまとめられた資料
（白い部分は住所の詳細であり削除した）

この青年乙女の会としてまとめられた資料のなかは、形態としては、一紙物がほとんどで、印刷物のほか、手書き原稿などの資料が封筒に収められている。1985年8月9日に作成された、平和宣言文の原稿などがある。(写真6参照)。手書きの原稿であるが、独自の宣言文作成が行われていたことを示しており興味深い資料であろう。

写真6：1985年8月9日 青年乙女の会平和宣言

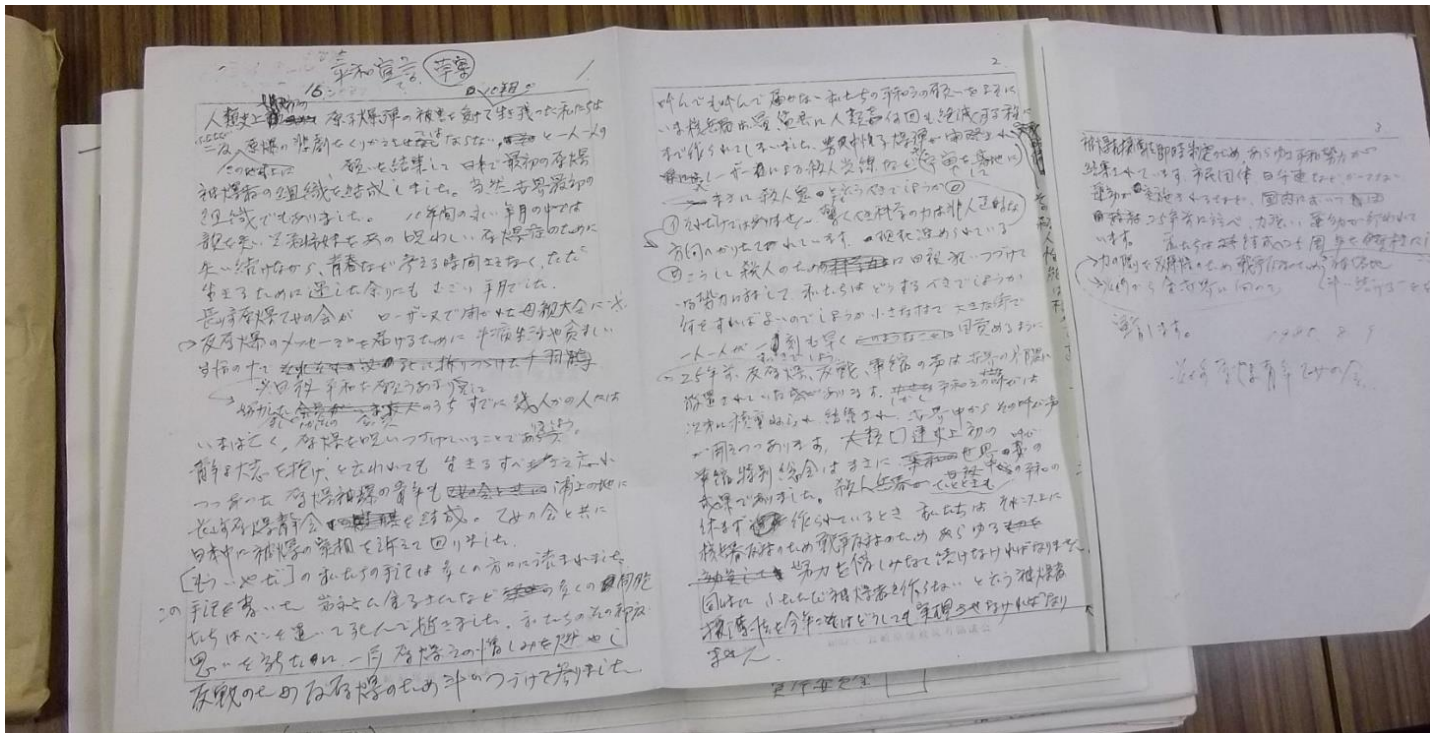


写真7：会員名簿

資料中には、1980年度の同会役員名簿もあり、

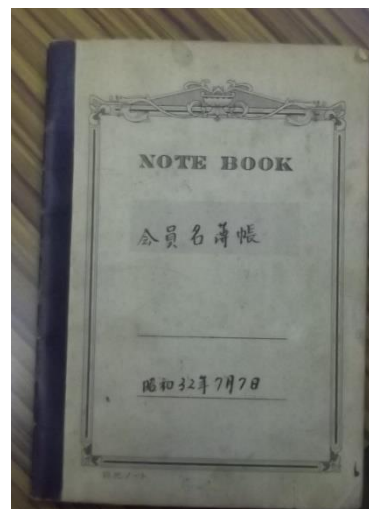
氏名	役職
井手麻行	被爆者の店
石原秋光	会計
唐永章	事務局長
渡辺千恵子	理事
永富柳太	理事
小松幸子	理事
山口仙二	理事
吉田勝二	理事
松尾穂子	代表委員
谷口稜暉	代表委員
長崎市	備考

代表委員として、山口仙二、谷口稜暉、岩永保、吉田勝二とならんで、渡辺千恵子の名がある。事務局長（会計兼務）は広瀬方人である。

写真7のように、青年乙女の会関係の会員名簿資料もある。おそらくカーボン紙を利用した手書きと思われるが、代表委員は、谷口稜暉、松尾紗智子で、渡辺氏は会計となっている。草創期以後の比較的早い時期のものと思われるが、今後作成年の推定が必要である。

他にも、写真8のように、おそらく青年乙女の会の関係だと思われる、昭和32年7月7日の日付が記された会計名簿帳もある。

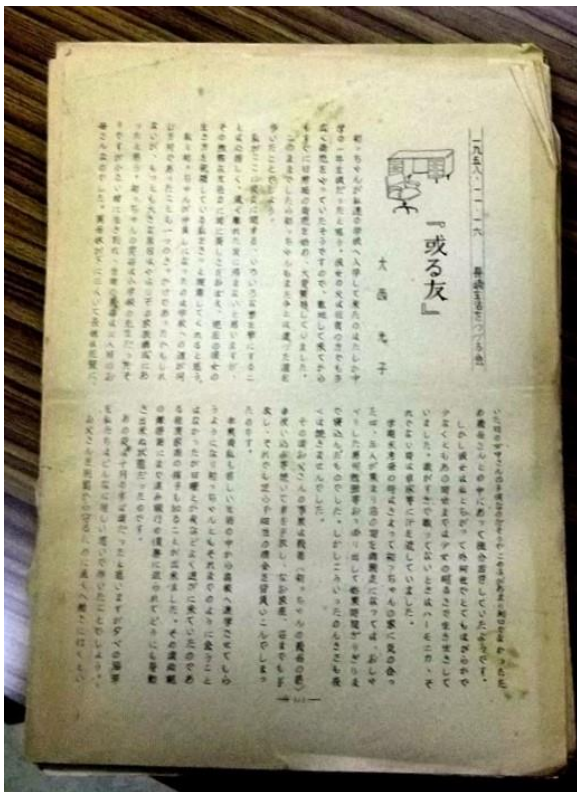
写真8：会員名簿帳



むろん、同会の会報である『ながさき』の初号（1958年2月）から5号までの分の所在も確認できている。

原水禁運動関係としては、早い時期のものとしては、1959年の世界大会資料（パンフレット）も残されており、後述するように写真アルバムには、1956年の第2回世界大会長崎大会のものがある。この世界大会の前に、長崎原爆被災者協議会（被災協）が発足している。

写真9：長崎生活をつづる会資料



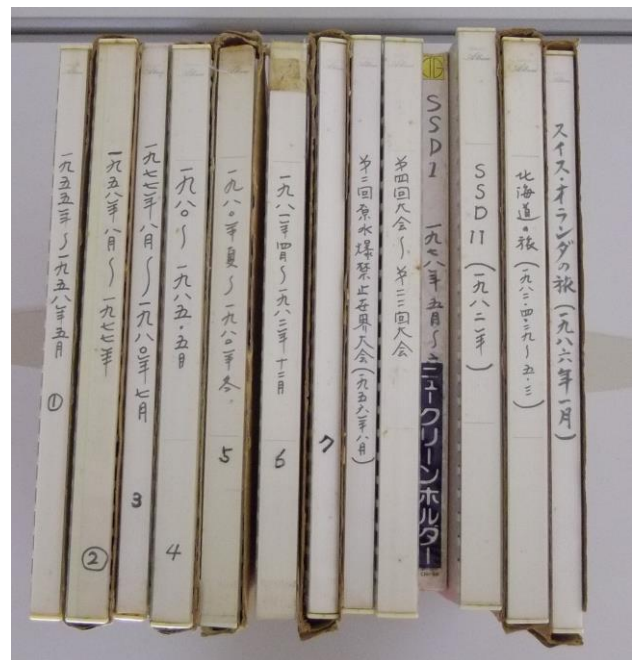
1950年代の被爆者運動につながる動向としては、長崎生活をつづる会の資料もある。写真9は、1958年11月の文集であるが、先にあげた福田須磨子の主な活動場所となったのが、同会であり、渡辺千恵子との接触あるいは交流の場でもあった（長崎女性史研究会編『長崎の女たち』長崎文献社、1991年）。写真アルバムのなかには、同会の例会写真もおさめられている。

5. 渡辺千恵子氏資料の紹介（3）写真、書

簡など

渡辺資料には写真もある。大判の写真アルバム帳があり、写真10のように、1955年から80年代まで7冊、おそらく渡辺氏が年次順に整理保存していただろうと思われる。また、原水禁の第2回世界大会は1冊に集められているほか、第4回大会から22回大会までが1冊となっている。

写真10：アルバム類



1978年の第1回国連軍縮特別総会（1978年）、第2回（1982年）が各1冊に集められている。スイス・オランダの旅（1986年1月）と題されているアルバムのよう、1980年代の日本国内外での証言活動、核廃絶を訴えるための行事への参加に関わる写真も多い。

また、いわゆるミニアルバムに収められている場合もあるほか、アルバムには整理されておらず、1枚ごとの場合もある。1枚ごとの場合、渡辺氏の著者や報道機関などに利用された写真の場合、大判のアルバム帳からはずされたものと推測される写真もあるだろう。一方、裏にも撮影時期や対象に関するメモがない写真も多く、目録的な整理が難しいものも多い。

写真 1 1：パネル写真（自宅）



写真 12：写真展用写真



写真 11 は自宅で撮影された写真パネルである。こうしたパネル化された写真や、写真 12 のように、なんらかの写真展かなにかの企画で作成使用されたと思われる、台紙に貼り付けた写真がある。こうしたパネル写真などを展示物として再利用できるかどうか検討していく必要もある。

写真についてはデジタル化して利用・活用することも考えられるが、著作権や肖像権の問題をはじめ検討クリアすべき課題は多い。

また、写真はそれのみで資料のなかにあるわけではない。作業用の分類で、「7 書簡、ハガキ等」としている資料の中で、写真などが同封されている場合も多い。一例をあげておこう。

写真 1 3：礼状に同封された写真

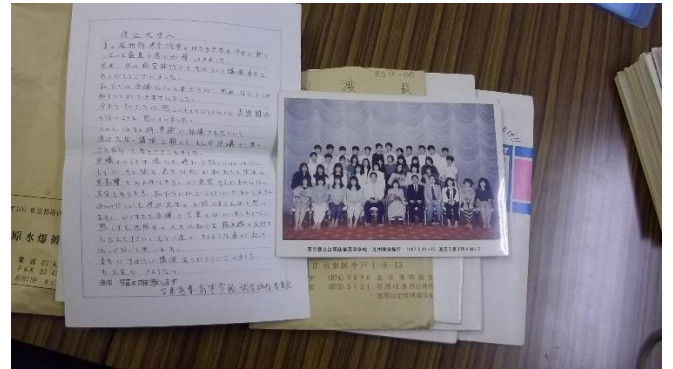


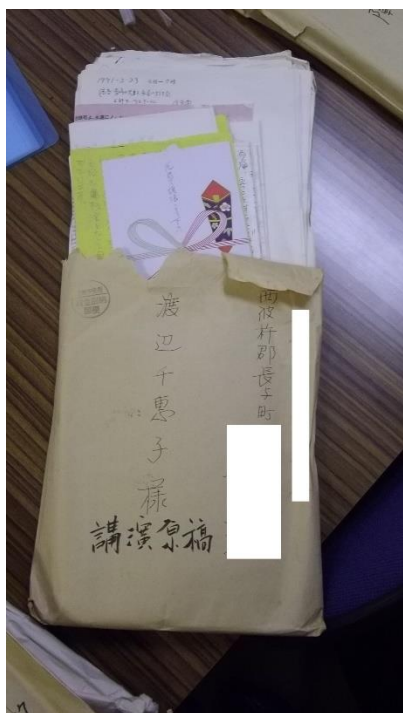
写真 1 3 は東京都立台東商業高等学校の 1987 年 5 月の日付がある九州修学旅行の記念写真（渡辺千恵子氏を囲んで とある）と、同校修学旅行委員会名の礼状である。このように写真だけで保存されているわけではなく、文集・感想文に同封されている場合も多い。

手紙やはがきのなかには、講演を受けたことや何らかの接触・交流のあった人々から渡辺氏に送られた物が多く、私的なものがどの程度あるかわからないが、年賀状や挨拶状など、渡辺氏の交流範囲や諸団体との関係性を考える材料となるかもしれない。

6. 渡辺千恵子氏資料の紹介（4）手書き原稿など

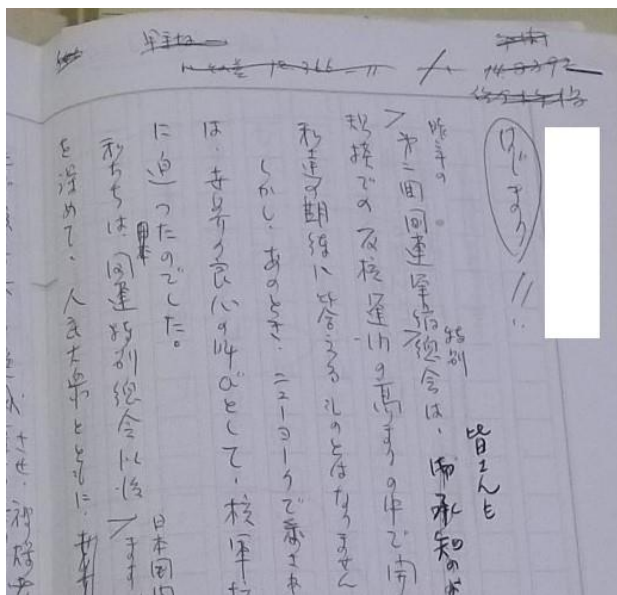
渡辺資料には、各種手書き原稿なども多い。原水禁世界大会、被爆者集会での訴えや挨拶等の原稿や、各種団体の集会での挨拶などの草稿、メモなども多くのこされている。

写真 14: : 講演原稿と題した封筒



このように封筒で一括されているものも多い。「講演原稿」とあるが、原稿だけではなく、関連するメモなども多い。また、どのような行事や企画の講演かどうかは確認することが難しい資料もおおい。

写真 15: : 原稿の一例



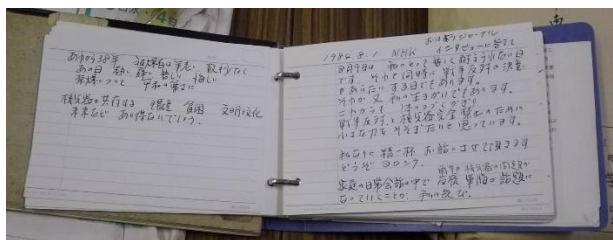
この原稿の場合は「昨年の第 2 回国連軍縮特別総会」とあるため、1983 年時点の原稿だろ

うとわかるが、このような原稿はそれほど多くない。世界大会や被爆者集会、反核・平和を求めた集会・行事での訴え等の草稿、原稿であり、貴重な資料であるが、検討に時間を要する資料でもある。

たとえば、1958 年 8 月 12 日、東京との記載があり、第 4 回原水禁運動世界大会総会との題目がある、ノートに手書きで記載されている原稿があるが、記載されている内容が公式の議事録で確認できるものなのかどうか、といった検討も必要であろう。

報道関係の取材への応答のためのメモもある。写真 16 の右側メモは、1984 年 8 月 1 日の日付と、NHK おはようジャーナルインタビューに答えて とある。事前に作成されたものか、当日（あるいは後日）に作成されているかは不明である。

写真 16: : メモの一例



このようにメモ書きあるいは草稿というべきものも多く残されており、そのなかには修学旅行生への講話原稿の下書き、準備のためのメモと思われる資料もある。

なお、原稿ということでは、『長崎に生きる』ほか著作物の原稿は、まだ所在を確認できていない。

7. 渡辺千恵子氏資料の紹介 — 遺品類

渡辺資料には、かなりの分量の様々な物品が残されており、遺品群といってよい資料だとする理由でもある。

写真 17：車椅子



晩年に利用していた車いすの写真であるが、この車椅子自体が 1970 年代末以降に渡部氏が使っていたころからの、いわば初代からのものなのか、あるいは後継の二台目・三台目であるのか不明である。座る部分などは本人が好んだ赤色を使用している。

渡辺氏が『長崎に生きる』でも言及しているが、母が購入してくれた編物機械のこと、長崎原爆青年乙女の会の編物グループの編物講習会などに関係するが、編み機や編み物類等も残されている。同じ機種編み機が 2017 年 1 月現在、ネットオークションなどで中古品として出品されているので、動作できるように整備することも可能かもしれない。

先に自宅で撮影されたパネル写真(写真 11)を示したが(そこにもむろん車椅子にすわる渡辺氏が写されている)、その写真中の食卓用の椅子も今回の資料に含まれている。

さらに、渡辺氏が購入愛用した品なのか、あるいは寄贈されたものかどうかといった来歴は不明だが、陶器製品などの物品も多い。写真 18 の通りである。

写真 18：陶器製品など



これ以外にも絵画などもあるほか、音楽や講演記録などが収められたカセットテープも 20 本近くあるし、ビデオテープも一本ある(ベータ規格のテープであり、録画されているか確認が必要である)。長崎原爆青年乙女の会二〇周年記念の集い(1974 年 8 月 9 日)と記載がある録音テープや、ジュネーブ NGO 軍縮国際会議の録音テープのように、当初、修学旅行生や関係者への被爆体験の講演や講話の記録テープがあるのであるのではと考えたが、全体としては少ない。

いずれにせよ、こうした物品の整理・処理について模索を続けなければならない。

おわりにかえて～被爆者資料をめぐる今後の課題

戦後 70 年を経た現在、きびしい表現となるが、被爆者“なき”後の被爆体験の継承という、否応なくやってくるであろう事態を想像したとき、差し迫った課題としては、被爆者資料の保存、保全の問題がある。これまでは、関係者が、まさに個人的に遺族や遺産とでもいうべき関連資料を引き受けていることも少なくなく、今回の故渡辺千恵子旧蔵資料もそうした資料の一つであ

ろう。また、核兵器廃絶を求めた運動、被爆者援護の活動のなかで、長く活動してきた個人（団体の役員達を含む）が高齢のうえに活動の一線から退いたり死去されることもまれではなくなっている。戦後社会運動の資料という点でも資料の散逸が懸念される。こうした資料の蓄積と関連させながら、資料保存の体制整備、活用・利用を展望した整理が進められる必要がある。その際、本学でもスペースや施設などの問題から、渡辺資料も暫時の所蔵となる可能性がないわけではない。まずは保存、維持が差し迫った課題であるなかで、渡辺資料の受贈はそうした状況に関する試験的な試みであり、本格的な保全・整理のための課題や問題点を考えるための材料としての意義を持たせるようにすることが今後の課題である。とりわけ、被爆者が残した資料群をそのまますべて保存できりとは限らないとすれば、なんらかの選別・選択を行わなければならないだろうが、どういった判断基準や指針が共通項的にありうるのかなのか、被爆者個人個人に即しての判断になるのか、課題となる。

医学や放射線物理学分野での研究の進展は、被爆者救済に大きな力となった一方、被爆者援護法制定により、区切りがついたとみられたのか、研究の停滞がもたらされることともなったとされたが、福島原発事故以後活発化せざるをえなくなり、原爆被害の研究も再度進展している。長崎では、核廃絶をめぐる政策動向や、国際情勢の検討、資料収集・調査は、長崎大学核兵器廃絶研究センターも設置され、すすんでいい。そうしたなかで、戦後の被爆者運動、平和運動の研究については、十分になされてきたとはいえないだろう。本稿の中でも指摘したように、草創期からの被爆者運動をになった渡辺千恵子氏資料を活用していけば、さまざまな分析解明もできると考えられる。

参考文献

- 1) 谷口稜暉『原爆を背負って 谷口稜暉聞き書き』西日本新聞社、2014 年。
- 2) 渡辺千恵子『長崎に生きる “原爆乙女” 渡辺千恵子の歩み』新日本出版社、1973 年、2015 年に新装版を刊行
- 3) 日比野正己『シリーズ福祉に生きる 7 渡辺千恵子』大空社 1998 年
- 4) 渡辺千恵子作・東本つね画『長崎を忘れない』草土文化、1980 年
- 5) 渡辺千恵子「私の自立」『季刊 科学と思想』新日本出版社、第 39 号、1981 年 1 月
- 6) 鎌田信子「福田須磨子ー「われなお生きてあり」の反原爆詩人」、同「渡辺千恵子ー核兵器のない世界をめざす不屈の語り部」（長崎女性史研究会編『長崎の女たち』長崎文献社、1991 年）
- 7) 長崎原爆の戦後史をのこす会『原爆後の七〇年ー長崎の記憶と記録を掘り起こす』同会、2016 年。
- 8) 『広島における原爆・核・被ばく関連の史・資料の集積と研究の現況』平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 編集・発行 広島大学文書館、2014 年 2 月